

援助なくしては完結しえない文章は、文学とはいえないはずだ。ところがその非文学が何か高級な文学みたいにと重に説かれているのは、ちよつとふしぎな光景だ。

この論断にはいろいろと反論もあることであろう。しかし痛快な論証である。この謡曲に反して、狂言の文学的価値を高く評価している。

VII 没落貴族の見果てぬ夢

「秋月物語」「白ぎくさらし」「熊野の本地」

VIII 中世の鈍い照りかえし

「三人法師」「あきみち」「一寸法師」「物くさ太郎」「文正さうし」

IX 町衆の未熟と御伽草子の運命

「ささやき竹」「乳母の草子」

○ お伽話と記録の世界

制限枚数をこえてしまつたので、VII以下は見出しだけにとどめたが、御伽草子などの特質論を通して、江戸時代において西鶴、近松などの作品において開花するにいたるまでの文学的可能性の芽生えを、そこに認めようとしているのである。

要するに、著者は、室町末期から江戸初期に至る間に生まれた文学で、今まであまりとりあげられなかつた作品に注目し、戦国乱世の中においても、文学を自由に扱うだけの文化的蓄積をもつていなかつた名主や下人、あるいは商

人の間において、文学がつくられていたことを指摘し、ここに文学性の芽生えを見出そうとしているのである。

終りに、著者の文学に対する概念が問題となるが、余白がないので、残された問題として、本文を読んで各自において考察せられるよう希望しておく。

(昭和四十年七月二日)

(岩波新書 二二三頁 一五〇円)

## ある女の生涯

—— 島崎藤村 ——

五郎丸 静子

この作品を続み終る時、藤村の他の作品にみられない深い感動をひしひしと感じさせられる。短編でもあるが、読者をして一気に読まずにはおかない何かをもつている。それほど女としてのあわれさ、宿命の悲しさを切々として訴えるものはない。

この主人公小山げんは、亡くなつた長姉で、木曾の葉種問屋に嫁した高瀬園子の暗鬱な不幸な後半世を書きつづつたものである。この姉は「家」では橋本種として旧家の切

りもりをする女主人として、又人一倍の苦勞人として最も丹念に描かれている。「夜明け前」では青山糸としてお種の前身でもある。

彼女は父正樹の性格を最もよく受けついでいる人として彼が敬愛している人であるが、夫から感染した病毒のためか、それとも父からの遺伝によるものか、晩年は精神分裂症になつて精神病院で一人さびしく死んでいく。おげんの封建社会に法つた女性の美しき、又血統の宿命に打ちひしがれその犠牲となつてまでもひたすら待ち続ける女ごころ、そしてついになるまいなるまいと恐れていた狂気におかされてしまう。「御霊さま」もここまでは守つてもらえず、彼女はひたすら晩年の父親の様子を思い浮べては父をあわれみ、ひとりでかきくどくのであつた。

この作品は大正十年七月、藤村五十才の時「新潮」に発表されたものである。姉園子はその前年の三月に死去している。この大正九年には短編「斎藤先生」(後の「貧しき理学士」(太陽)「涙」(解放)又は「エトランゼ」(東京朝日新聞)そして童話集「ふるさと」(実業の日本社)を発表している。またその前年の大正八年には「新生」の上、下巻を又「桜の実の熟する時」を春陽堂から刊行して、この「ある女の生涯」で「破戒」「春」「家」と続いた一連の自伝的小説を終つている。その意味からもこの作品は一つの頂点に達したものと見て、内容の上からも又作

風の上からも一段と老熟した筆運びを見せている。亀井勝一郎は「ある女の生涯」はたしかに或る完成を示している。文章の格調、筆致の沈静底光りを発してゐる点など、以前にはみられなかつたところだといつてゐる。

これはおげんが半年も前から思ひたつて、懇意である峰谷の病院に養生にくるところから始まる。彼女のなんでも世を去り、ただ一人の息子にも先だたれ、頼みのお新は不具である。それだけに一層その愛におほれる。お新はもう四十の年になるが人形のような処女である。おげんも六十であるが、この一日も手放しがたいものに思うお新をつれ、最後の「隠れ家」でも求めるようにして家を出て来たのである。彼女はしばらくこの病院で養生して、弟たちのいる東京まで行つて独立して暮らしたいと念願していた。しかし彼女の精神状態は、外から見ただけでもそれを許すことは出来なかつたのである。彼女が火のついた炭俵を垣根の方に投げたりする様ななどは正常を出ている。又彼女の中で二人の女が言い合う状態は明らかに分裂の兆をみせている。家の人たちに警戒されて刃物という刃物を隠されて、年をとつたおげんがつくづくこの世の冷たさを思い知つたのも、いかに彼女が自分ばかり気の確かなつもりでも家の人たちが養子夫婦を苦しめることが多かつたかを推察できる。

彼女の夫は生来の放蕩者で茶屋酒に通つては芸者を囲

い、父としては子を傷つけ、夫としては妻を傷つけて来たのである。おげんもその度に何度か家を出ようかと思つたこともあつたが、「自分の前に手をつけて平あやまりにあやまるだんなを目の前に見、やさしい声の一つも聞くと、つい何もかも忘れてだんなを許してしまう」おげんである。彼女は考へる。「だんなの生前に、自分がもつとだんなの酒の相手でもして、うたの一つも歌えるような女であつたなら、だんなもあれほどの放蕩はしないですんだらうに」と。又お新のことについても「幼い時分に二階のはしごだんから落ちて、ひどく脳を打つてそれからあんな発育のおくれたものになつたとは、これまで彼女が家の人たちにも親戚にも誰れに向つてもそういうふうにはばかり話してきたが、実はあの不幸な娘のこの世に生まれ落ちる日からはやあゝいう運命のもとにあつたとはだんなだけではない、彼女あたることもあつたらうにと。そればかりではない、彼女自身にも人に言えない深手を負わせられていた」のである。しかしこのお新は父親似であつた。娘と向い合つてゐる時は、亡くなつただんなと向い合つてゐる思いをさせる。どこかのたんぼの方から聞えてくるかわずの鳴き声は、さかんな繁殖の聲に聞えて医院の草木までが憂鬱で悩ましかつたのである。上京したおげんは、独立するため家でも借りてくれるように頼むが弟たちは取り合つてはくれず、たゞ姉の様子を見守るだけである。かえつて弟は養生

園に入れてしまふ。最後の「隠れ家」を求めつつもりで園を出て来たおげんは、その養生園の一室で白い制服を着た看護婦達と生活する身となつてしまつた。

ここに入れられたおげんの精神状態はより一層極限状態に追いやられて悪化して行つた。彼女の夢に現われるのは、仲むつまじい養子夫婦であり、そのねたましさである。又見えないはずの白い犬が現れる。「人間の淫湯の秘密を覚えたかと思われる。」「長い間苦節を守り続けてきた女の徳までも平気で破りに来ようと思われる」「白い犬である。病状はいよいよ悪化して再び精神病院に入れられることになつた。」「おとうさま——お前さまの心持は、このおれにはよくわかるぞなし。おれもお前さまの娘だ。お前さまに小さな時分から教えられたことを忘れなばかりに——おれもこんなところへ来た。」「彼女は自分で行きたくない行きたくないと思ふところへ我知らず引き込まれて行きそうになつたのである。

おげんは父が座敷牢の格子のところまで悲しみもだえた時の古歌を思い出した。それを自分でも口ずさみながら死んでいつた。

ここで藤村はおげんに対して、絶大なる共感をもつて描いている。文章は写實的でリアルであるが、そこにはにじみ出るおげんへの同情が現われている。単に宿命の血統をおびた悲劇の主人公としてだけでなく、日本の家族関

係、婚姻関係から来る古い時代の女性の生き方、犠牲を犠牲とも感じない、貞節なる女の徳の美しさ、あるいはそれを通し続けたい程の女の想い。それを作者は、折から重なった精神の極限状態に於て、女のあわれさ悲しさを描き切っている。

おげんは「夜明け前」のお糸であるが、彼女は親の取り決めた婚約に対して、自殺して抗議をするような性格の持ち主である。「家」のお種も同様女主人として家を切りまわしているが、夫が事業に失敗し、女道楽に家出をして苦勞する。旧家の家長意議があつて女丈夫のようなところも見えるが、放蕩する夫の前にあつては生血をとられた亡霊に等しい。おげんもお新を頼つて「御霊さま」を信じて生きてゐる亡霊にすぎない。おまけに夫からは病毒を移された狂人である。

この作品で最も感動的なところは、おげんが養生園から精神病院に移るところである。退院と聞かされたおげんは子供のようにうれしがらる。しかし着いたところはおげんの座敷牢にすぎない。

藤村は「市井にありて」の中で次のようにいつている。ロマンは足の彫刻をする時、まず全体の体を創ておきその後他の部分を碎いてしまった。文章に於いてもそのようになければならないといつているが、この「ある女の生涯」は正にその言葉を裏書きしているような作品である。藤村

の短編の中でも特に秀れていて長編に劣らぬ力量を見せている。

## 解説と鑑賞

### 狭衣物語解釈(1)

本田義彦

少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ、弥生の二十日余りにもなりぬ。御前の木立なにとなく青み渡りて木暗きなかに、中島の藤は、松にとのみ思はず咲き懸りて山時鳥待ち顔なるに、池の汀の八重山吹は、井手のわたりに異ならず見渡さるゝ夕映のをかしさを、独り見給ふも飽かねば、侍童のをかしげなるして一枝つつ折らせ給ひて、源氏の宮の御方に持て参り給へれば、御前には、中納言・中将などやうの人々侍はせ給ひて、宮は御手番ひ、絵などかきすさびて添ひ臥させ給へるに、「この花の夕映こそ、常よりもをかしく侍れ。春宮の、『盛りには必ず見せよ。』と宣はするものを。」とて、打置き給ふを、宮少し起き上りて見おこせ給へる御まみ・つらつきなどの美しさ、花の匂ひ藤のしなひにもこよなく優りて見え給ふを、

例の胸塞がりまさりて、つくづくとまもられ給ふに、「花こそ花の」と、取り分ぎ給ひて、山吹を手まさぐりし給へる御手つきの、いとど持て囃されて、世に知らずうつくしげなるを、人目も知らず我が身に引き添へまほしく思さるるぞいみじきや。

〔口訳〕

白楽天の詩に「惜少年春」とあるように、少年は人生の春であるが、春というものはいくら惜しんでもとどまらぬものであるから、その春もすでに陰曆三月の二十日余りにもなつてしまつた。庭前の木立もどことなく一面青味をおび茂りあつて暗いなかに、泉水の中島の藤の花は、「夏にこそ」の古歌にあるように、松に咲き懸るとばかり思つていたのに、思いもかけず夏を待つて咲きかゝつて、山時鳥を待ち顔であるのに、池の汀の八重山吹は、有名な井手のあたりにも異ならず趣深く見渡される夕映の美しさを、独りで眺めているのも物足らぬ思いがなされるので、その方は、侍童のかわいらしげなのに、藤の花と山吹の花とを一枝ずつ折らせなざつて、源氏の宮の御殿の方に持つておいでになると、御前には、中納言や中将などといった女房たちをはべらせなざつて、宮は御手習や絵などをかき興じてらく寝しておられる所に、「この花が夕日に照り映えている様は、いつもより趣深いことです。春宮様も『花盛りには必ず見せよ。』とおつしやつていらつしやるのですよ。」といつて、その花をお置きになるのを、宮は少し身を起してこちらを御覧になる御目つきや御顔つきなどの可憐さは、桜の花の色あいや

藤の花房のしなやかさにもこの上なくまさつてお見えになるのを、いつものように一層胸がせまつてきて、思わずじつと見守つておいでになるのに、宮は「花こそ花の」という古歌を口ずさびつゝ取り分けなざつて、山吹をもてあそんでいらつしやる御手つきが、花の色に引き立てられて、ひとしおひどくかわゆくお見えになるので、人目もかまわずわが身に引き寄せたくお思ひになるその胸のうちは、たいへんなものでありますよ。

〔註記〕

○少年の春——「背燭共憐深夜月 踏花同惜 少年春」  
白楽天白氏文集卷十三にあるが、和漢朗詠集卷上春にも載せる。

○松にとのみ——「夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな」拾遺集夏・源重之

○山時鳥——（参考）「我が宿の池の藤波咲きにけり山時鳥いつか来鳴かむ」古今集夏・読人知らず

○池の汀の——（参考）「いひやらむ方のなきかな池水の汀に咲ける八重の山吹」夫木抄卷六山吹・小辨

○井手のわたり——山城国相楽郡にあつて古来山吹の名所として有名である。石川雅望・清水浜臣書入本には「春の池や井手の河せにかよふらん岸の山吹そもにはへり」源氏胡蝶をあげてあるが、古今集以下、井手の山吹をよんだ歌は多い。「蛙なく井手の山吹ちりにけり花の盛りにあはましものを」古今集・読人しらず「春ふかみ井手の川波立ちかへり見てこそゆかめ山吹の花」拾遺集・源順 「道遠し井手へもゆかじこの里も八重